



Title	『六朝士大夫の精神』刊行に寄せて
Author(s)	若槻, 俊秀
Citation	中国研究集刊. 1986, 3, p. 62-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『六朝士大夫の精神』刊行に寄せて

若槻俊秀

このたび、森三樹三郎の六朝精神史研究として不朽の論考と評されている「六朝士大夫の精神」（昭和二十九年、大阪大学文学部紀要三）、「魏晋時代における人間の発見」昭和二十四年、（東洋文化の問題一）の二篇が、『六朝士大夫の精神』と題する一書の中に収められ、同朋舎から刊行されることになった。

兩篇は発表されてから既に三十年以上の歳月を経ているが、その間およそ六朝時代を研究しようと志す者にとって第一に参考せねばならない論考として高い評価を与えられてきていることは周知の事実である。ただ惜しむらくは、その掲載が、紀要という大変限られた場所であつた為、それを閲覽するのにいささか煩わしい手続をせざるを得なかつた。早い時期より一書として公刊を欲する多くの研究者からの要望があつたにもかかわらず、それが実現しないままに今日にまで及んでしまったわけである。そのような事情を顧るにつけても、このたびの本書刊

行の実現は、斯学研究者にとってまことに慶賀すべきものである。ここに受業生の一人として、本書の刊行にちなんで先生のご研究、ないしは本書をめぐることもどもについての紹介の意味をも込めて一文を草させて頂くことにする。

森三樹三郎先生は明治四十二年、京都府舞鶴市に生れられ、昭和十年、京都帝国大学文学部哲学科支那哲学史専攻を卒業になられた。指導は小島祐馬教授。その後文学部副手、東方文化学院京都研究所助手、大阪高等学校教授を経て、昭和二十四年大阪大学文学部助教、昭和四十一年教授、四十八年停年により退職された後、仏教大学教授として現在に至っていられる。他に昭和二十八年より三十年余り大谷大学の非常勤講師を勤められている。森先生の著述についての詳細は、『森三樹三郎博士頌寿記念事業集』、『昭和五十四年、森三樹三郎博士頌寿記念事業会』に附する著作目録があつて知ることができる。試みに著作目録を披覽しながら、先生のご研究の歩みをたどつ

てみることにしたい。

先生の三十歳代までの研究の結果は、『支那古代神話』（昭和十九年、大雅堂）として示された。本邦における初めての中国の神話に関する専著として、また今日に至るまでの神話研究の数少ない専門書として注目をうけているものである。不幸な戦争を経ての戦後の先生のご関心は、「漢代までの文化は支那文化の骨格を形成するものであり、これに対して魏晉時代のそれは、支那文化に血と肉とを与えたものであると言えよう。」（「魏晉時代における人間の発見」といわれるところの「支那文化の血肉」に向けられていることがわかる。このたびのご著書収録の二篇はその代表であらうし、『梁の武帝』（昭和三十一年、平楽寺書店）、「まじないと練り葉の宗教（道教）」（昭和四十年、『思想の歴史』第四巻、中央公論社）での仏教・道教に対するご考察なども、先生の一連の六朝文化への強い関心のあらわれであろう。

また先生の老荘思想への関心の深さが注目される。具体的な形としては、「莊子（訳注及び解題）」（昭和四十三年、世界の名著四、中央公論社）、「莊子」（上・中・下）（昭和四十八年、四十九年、中公文庫、中央公論社）、「老子・莊子」（昭和五十三年、人類の知的遺産五、講談社）、「老荘と仏教」（昭和六十一年、法蔵館）、「「無」の思想」（昭和四十四年、講談社現代新書、講談社）等の書物群として公けにされている。また『「名」と恥の文化―中国人と日本人―』（昭和四十

六年、講談社）、「神なき時代」（昭和五十一年、講談社）は、現代のわれわれが直面しているさまざまな問題を、鋭くさし示された評論の書であり、先生の真骨頂をいかに表わしたものである。

老荘思想のご研究の進展に伴う必然の結果としての先生の秀れた中国仏教に対する数々のご創見があげられる。特に禪と浄土教は、莊子のいわば一卵性双生児であるというご意見は、従来莊子と禪との関連しか見てこなかった中国仏教研究者に大きな啓示を与えたものである。更に進んで浄土教の流れの終着点に位置する親鸞の思想に、実は莊子の影響が色濃くあらわれているというご指摘は、今後の真宗学者に大きな課題として残されつづけることであらう。『「無」の思想』第五章の「自然法爾の思想―莊子と親鸞」、『老荘と仏教』における「死の象徴としての阿弥陀仏」等の諸篇は、それらの中でも最も重い問題提起の論考である。

さらに数十年のご検討を経られて上梓された講義録『中国思想史』（上・下）（昭和五十三年、レグルス文庫、第三文明社）は、随処に先生のご創見をのぞかせ、個性豊かな通史を展開して下さった。大学での思想史講義の絶好の概論書として多くの担当者によって用意されている。その他幾つかの紹介をしなればならないところであるが、いまは一応この辺りにて止めておきたい。

先生は、何事においても常に深い見識をもって臨まれる。研

究発表とか講演の時のメリハリの効いた話術、巧みな話の運び方は、夙に定評のあるところである。また重厚にして明解な文章も森流とでも称される確立されたものがある。これらは偏えに論点の明確さと、明晰な思考力があって初めて可能なのである。

つぎに、今度の本書の刊行に関連して、先生の中国文化研究の基礎的な考え方、および六朝時代研究のための基本姿勢などについて、各所で示されている文章を引用しながら窺ってみることにする。

西洋と東洋、インドと中国という相異なる地域や国の文化・思想を考える場合、最初に踏まねばならぬ手続として、それらの文化を支えてきた担い手は、どういう人々であったかということからなされねばならないとされる。『中国思想を学ぶ人のために』（昭和六十年、世界思想社）の「はしがき」で次の如く述べられる。

過去の中国文化を支えてきたのは、士大夫と呼ばれる官吏の身分をもつ知識人たちであった。この点ではインド文化を担ってきたのがバラモンと呼ばれる宗教家、司祭者であったのと対照的である。その結果、インドの文化ないし思想が著しく宗教的色彩を帯びているのに対し、中国の思想には宗教的ないし哲学的な要素が乏しく、これに代って政治・道徳への傾斜がきわめて強い。しかし、このように儒教の支配を許してきた中国人も、人間であるからには、宗教や哲学への関

心をまったく欠いていたわけでは決してない。歴史の変遷につれて、文化の担い手である知識人の性格にも変動が生じ、政治的関心よりも宗教的関心が上まわる時代さえあった。六朝隋唐の七百年間などは、その著しい例である。

右のご指摘は、東西の思想を徒らに比較して、単にその相違を論ずるのみではなく、まず文化の担い手の確認からはじめるべきだとの貴重なアドバイスである。先年仏教大学で開催された比較思想学会で行なわれたシンポジウム^①の報告者として先生が同主旨の意見を述べられたが、大きな反響を呼んだことである。

ところで本書の題名『六朝士大夫の精神』とあるうちの「精神」を「思想」とされなかったことについては、『梁の武帝』の「あとがき」で詳しく説明しておられる。先生の六朝研究の姿勢が明確に示されていると思われるので、長文ながら引かせてもらうことにする。

元来、思想史を専攻すべきは私の私、いつの間にか精神史の研究に乗り換えた格好になったが、これには私なりの理由がある。中国思想史の専門家は必ずしも乏しいとは言えないが、それに比べると精神史の分野は、まだまだ開拓が十分でないように思われるからである。

このように言うと、それでは思想と精神の違いはどこにあるか、という疑問が起るかも知れない。これにも私なりの解答をしておきたいと思う。私の理解するところでは精神とは、

我々人間の内部にあって、我々の生活を動かしてゆく、一種の力である。これに対して思想は、そういう力を備えている場合もあるが、しかし、時には頭の中の構想だけに止まって、身体化されない場合がある。この場合には、思想は生活の推進力であると言えず、したがって精神としての資格を欠いていることになる。このような区別は新しいものではなく、常識の世界でも行なわれているのであって、精神力という熟語はあるが、思想力といった言葉はあまり聞かれないことからも知られる。いま一つ、両者の異なる点は、表現の仕方がそれぞれに違うということである。思想は思想の言葉によって語られるよりほかに道がない。これに対して精神は、むしろ言葉をも重要な表現の手段とするけれども、しかし、それだけに限定されない。精神は、必ずしも言葉という媒介を借らないで、直接に行動となって現われる。(中略)

このように、普通思想史があまり問題にしない零細で断片的な言葉、思想の言葉になっていない片言隻句や、その人物の行動、さらには歴史事実を、いわば「解説」することによって、精神史を構成してみようというのである。古来中国人は、思想の言葉で語ることが余り得意でなかったように思われる。というよりも、言葉というものに信用をおかず、言葉を以て語ることを好まなかったように見受けられる。(中略)

このような民族の思想史や精神史を跡づける場合に、従来のように思想の言葉によって表現されたものだけを追及しているのでは、思想史そのものの内容が貧弱になってしまふ恐れがある。むしろ、そのような思想史が取り残したところに、中国民族本来の思想や精神が隠されているのではないか、という気がする。

以上のような先生のご見解の表明は、「六朝士大夫の精神」が発表された昭和二十九年より二年後の『梁の武帝』の刊行によって知られることになったわけである。

「六朝士大夫の精神」は確かにそういう先生の見解にもとづけられた大作である。基本資料である各正史に本格的に立向かわれ、当時の人々の声にならない声を、ひとつ残らず拾いあげ、最初は聞こえない程のかすかな声であったものを、積み上げることによって、遂には聴きとれるまでにしてしまわれるという困難な作業を通して完成されたご論考は、当然のことながら高い評価を現在に至るまで得ているわけである。

以上まことに粗雑な紹介に終ってしまったが、ともかく本書を一読するだけで構成のみごとさ、論旨の確かさ、随所に見られる先生の発明に圧倒されることであろう。敢えて蕪辞をつらねて本書の紹介とさせていただく次第である。